

Title	新出朝倉重賢筆『ちやうりやう』絵巻の本文と解説
Sub Title	
Author	辻, 英子(Tsuji, Eiko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2018
Jtitle	三田國文 No.63 (2018. 12) ,p.69- 93
JaLC DOI	10.14991/002.20181200-0069
Abstract	
Notes	挿図
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20181200-0069

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新出朝倉重賢筆『ちやうりやう』絵巻の本文と解説

辻 英子

はじめに

朝倉重賢の自筆絵巻は、従来四点が知られていた。このほど新出の聖徳大学所蔵『ちやうりやう』（仮称）絵巻の調査の機会（二〇一八年四月）に恵まれ、所蔵者より公表の許可（二〇一八年七月）をいただいたので、本誌に報告する次第である。

本絵巻は題簽も内題もないが、内容から「ちやうりやう」絵巻としてよい。張良とは、漢初の功臣で、高祖劉邦の軍師であった。曲名表記「ちやうりやう」（張良・長良・ちやう良・長郎・長郎）は幸若舞曲唯一の中国もので、翁即ち観世音菩薩から張良が兵法を授かる話である。

本書奥書の署名・印章に「筆者市丞相倉氏重賢（朱印「松田」）とある。これまで同筆の奥書を有する二つの絵巻を拙著で紹介してきた。一つは「国文学研究資料館蔵『羅生門絵巻』二軸・「市丞相倉氏重賢書之（墨印「松田」）」（在外日本絵巻の研究と資料）笠間書院 一九九九年）および「スเปนサー・コレクシヨン蔵『大職冠』二軸・「市丞相倉重賢書之（墨印「松田」）」（「スเปนサー・蔵日本絵巻物抄付石山寺蔵」笠間書院 二〇〇

二年）で、この度は三点目の新資料の紹介である。次に本文の翻刻を提示する。改行・余白も原文のままである。

一 『ちやうりやう』詞書翻刻

さるほとにちやうりやうはてんか
をおさめんそのためにしゆふう
せんへそまいりけるかの御たうの
ほんそんは十一めんくほんおんなり
この御たうにまいりよるも三十三
くはんひるも三十三くはんのくはん
おんきやうをよみ大したいひの
くはんならはりしやうあらたになし
てたひ給へとしんくをいたし一
七日こもり給ひけりまんしけるそ
の夜はんはかりにかたしけなくも御
ほんそんはみちやうのうちよりも
あらたなる御こゑをいたさせ給ひわ
れは大したいひのちかひにてしゆ

(第1紙)

しやうさいとのほうへんあらまほしき
によつてよるとなくひるとなくり
しやうのはうへんをめくらしける
ところまことになんちりしやうを
かうふらんとおもはくこのまへにな
かるゝ川について百日しもにくた
るへしそれしんくをおこして百
日くたるものならはちやうみやうこ
くといふくにゝつくへしかのくに
ちうわうにひとつのはしをわた
るへしそのはしのつめに七日たつ
てまつならは八しゆんはかりのおきな
にあふへしかのおきなにあひて
なんちかしよくはんを申へしとそ
しめさるゝありかたき御しけんかな
とてかのみたらし川につき

やうくくたらせ

給ひけり
(第2紙)

(絵一) (第3紙)

それみちすからのありさまはしか
のすみかとらふす野へかゝる大こく
のひろき野をゆきすきかうたく
のつゝみをつたひて百日と申には
ちやうみやうこくにそつきにける
さるほとにをしへのことくかのくに

5

10

15

5

の中ほとにひとつのはしこそわた
されたればしらにはるりをのへゆ
きけたにはこかねをしきすのこは
しやこめなうなりはしたかくて雲
にそひえてたゝにしを引よることく
なりみるにきもきえ心をいたまし
めひきふるひあしすきましく身
のけよちてわたるへきやうさらに
なしされともしけんなりければむ
かひへわたる人にあひてとはゝやと
思ひてすのこをあゆむかのちやうり
やうの心さしすゑたのもしうそみえに
ける (第4紙)

(絵二) (第5紙)

されはあまりのいふせさにめをふさ
きやうくはしをわたり給へはちう
ていのことなるにむかひをきつと
見てあれば八しゆんはかりのおきな
しろきかりきぬをきてあしけなる
こまにのりなからさしもにせはき
このはしをとゝろかけてわたさるゝ
ちやうりやうこれを見てあとへもつ
て馬のりをたやすくわたさはやと
思ひしかわれはさきよりわたりかゝりし
ものなるにあのむまのりはのち

10

15

5

10

にわたし候なれはかへさは馬をこそかへすへけれわれはなにしにかへるへき

わたるにこそとおもひければおもてもふらすわたりけれされははし

のたゝ中にて馬人ともにまつはな

つきにこそわたりあふすてにそこ□

て馬人うちかはんとせしときに

ゆんてのくつをちやうりやうか袖の

くちに引かけてはしのすのこにお

したりちやうりやうはもとよりしん

きたゝしくおいたるをもつてふも

のことくやまふにはゝかりなしとて

いそきくつをとりあけておきな

にあたへしかかけてはかんとしてとり

はつしおとさるゝなをとりあけて

まいらするにかゝはしたりけんこのく

つを又こそおとし給ひけれかさねて

とりあけんとせし時いさめるこまに

けられてはしよりしもにおちて

ゆくおきなこのよし御らんしてあれ

をゝとおほせければこのくつをと

らんとてちやうりやうともにおち

にけりそのはしのたかき三十よち

やうなりくつは水にうかひてなかれ

ゆくちやうりやうみつにおちついで

(第6紙)

15

5

10

15

なかるゝくつをとらんとおよきければ
みつのそこらいてんしうつまき

かけて五六ちやうあまりなる大しや
ひとつうかひいつかしらのつのは十六

ひれにつるきをはさみたてまなこは

たゝ夕日の水にうつろふことくにて

くれなるのことくなりしたのさを

ふりたてすてにちやうりやうをの

まんけしきそしたりけるちやうりや

うすこしもさはかすおよきよつて

そのくつをとり大しやのつののにの

りければ大しやはなをもいかりを

なせしかいかゝは思ひけんかしらに

いたきあけてちやうりやうをはし

のつめにおろしければつゐにくつ

をとりあけて

おきなにそあたへ

たてまつる (第8紙)

(第7紙)

5

10

〔絵三〕 (第9紙)

おきな御らんしてあつかうなりやちや
うりやうさやうの心にてこそひやう

ほうのかなふへけれなんちかかうお
くをたゝさんそのためにしゆくの
さうをけんしたりいささらはこのつ
ゐてにおきなかしやうとおかま
せんみちとをうしてかなふましそれは
この馬のおつゝにとりついでのり
かた手にてはめをふさきたてまつれ
ちやうりやううけ給はり候とてゆん
ての手にておつゝをにきりめての
手にてめをふさきおほせのことく
こしらへて候と申せはおきなきこし
めされてかすみのむちをあてさせ
給へは馬はてんにあかれはせつなか
あひたになんはうのくはんおんのし
やうとにつき給へは馬はへいちに
とひつきぬおきなすなはちくはんおん
にて三十二さうをあらはしみけんの
ひやくかうくもをわけさかん月のわの
ことく御まゆすみにかつらをかき御く
ちひるははちすのかたふくかことく也
きよいの袖くんしていきやうまと
かににほひありさうのてんとうはた
をさして御むかひにまいれはさうこん
のてんとうはくもの袖をひるかへし
廿五のほさつたち三十二さうに

(第10紙)

5

わけてようかうたりかふのほさつは
こゑくにきよくをなしたまひあそふ
ちうしやくきんくこうひわによう
とうはつまてもたつとからすといふ
事なししちくのしらへこまやかに

10

かんたんきもにめいしたりさてちや
うりやうを引くしていらせ給ひけり
あら有かたの御ことやしやうとをお
かむめてたさやかてあんやうくはん
といふものをとりいたさせ給ひ

15

このまきものゝとくゆうは大しんつう
をあきらめよ世のきつけうをあらはし
てんかたいへいこくとあんおんしゆみや
うちやうおんなることもこのまきものゝ
うちにあるへしそれ給はりたへちやうり
やうあまりのかたしけなさに三といった
たきくわいちうす一くはんの書

これなり

(第12紙)

5

〔絵四〕 (第13紙)
そのゝちさうのとうしをいたししやう
とのせんと申てことはにもをよひ
かたきさけをへいるりのつほにいれ
いのちなかえの御てうしさいはひひら

10

15

20

5

くさかつきちんみのくわしをさかなに
てそれたまはれちやうりやうあまり
のかたしけなさに三といたゝきたふ
くゝとひとつうけほさんとせしときお
きな御らんしていかにやちやうりやう
さかつきをひかへよなんちかしやうみや
うこくにてくつのわつらひにさけの
ゐとくをかたつてきかせんむかしなから
の大わうしゆみのはんふくにあかり
ふものおんをほうせんためにはくせき
のたうを三十六ちうにくむそのたう
たつて七か年と申時たうの中よ

りもまかまんたらけまかまんしゆ

しやけとてしゆくゝのれんけさくれん
けちつてひやくみのくわしとなるある
ときけふつほさつはしゆみのはんふく
にあかりはくせきのたうをおかませ
給ふにあらめてたやむかしやうにこそ
いしに花のさいてみのなると申せこ
れはさなからいしに花のさいてみの
なることのめてたさよとひとつととり
てふくすればてんのかんろのことし
今ひとつとりておひに入なんりやう
けんといふやまはたかさも四まんゆ
しゆんひろさも四まんゆしゆんにてき

(第14紙)

5

10

15

5

10

くよりほかのくさおひすそのきくの
葉にをくつゆかしたのきのみ
おちあひてふらうふしのくすりと
なるやくしのしやうとゝてふらうせんこ
のしやうとにてあかたやく人けんに
あたふれはその名をやはらけてす
なはちさけと申なりことにこのあかた
せんはいちとのめは一千人二とのめ
は二千人かちからつきつゝしゆみやうち
やうおんなるさけなり給はり給へちやう
りやうあまりのかたしけなさに三と
つゝけてくみにけり二こんになれは
さかなとてあふき一ほんいたさるゝ
このあふきと申はたゝめは八つの
ほねひらは二十五のほねは二十五の
ほさつ八つのほねはやくわうほさつ
このあふきをもちぬれはたとひね
かはすとすくにしやうとへまいるへし
ゑんめいさうとかひて(や)はいのちをの
ふるとよまれたりこれをさかなに
いまひとつたまはり給へやちやうり
やううけたまはつて

又三とこそ

くみに

けれ

(第16紙)

(第15紙)

5

10

〔繪五〕 (第17紙)

三こんにさかなとてむちをひとつ
いたさるゝさうかいふと申てこのむち
をこしにさしうみ川をわたるに
へいちをありくことくにてみつ
そこにもしつまつかいちうにいる
ともそのみつ身にします身をかく
さんとおもふときわうきやうのほう
ををこなはゝ木のはのしたにかく
るとも人けんのまなこにみゆる
事なしかゝるめてたきてうほう
そかしこれをさかなにいまひとつ
たまはり給へちやうりやううけ給は
つてよき御さかなかなおほせはお
もしもとよりもちやうりやうは大しめ
にてましませはさしうけゝのむ
ほとに八十一度そ給ふたりける
をよそちからは八百人かちからなり
ありかたしとも中／＼申にをよは
さりけりてうほうのゆを給はれは
はやかへらんとおもへともみちをたし

(第18紙)

15

10

5

かにしらされはあんしわつらふてそ
るたりけりされはそのようにこそゑん
めいさうとさうかいふとを給はれまね
かはやとおもひてわかふるさとのかた
をまねきけりされともとをきこき

やうにたゝ一時についてゑいくわに
さかへ給ひけりさるほとにちやう
りやう大わうにまいりこのよし申あけ
ければみかとのよしきこしめしち
やうりやうはすてに七十二になるも
のなりいまた十七八のよそほひと
おほえければちやうりやううけ給はり候
上かいへあかりふしのくすりを給はり候
ゆへかやうにわくなりて候と申ければ
かうそきこしめしありかたき事なんちか
上かいへわたりてうほうをならひける
ものかないかてか三ほうの御りしやう
のなからんとて七十にあまりてしうの
くらゐにのほりける (第19紙)

〔繪六〕 (第20紙)

みうちのはんくわいちやうりやうに
くらいをこされやすからぬことかなと
てゆみとり五百人そろへしやかうかり
となつてひろき野へにうちいてゝ
ちやうりやうかかよひちを三年三月

5

15

10

5

そうかゝひけるちやうりやうはそのこ
ろおのゝ山のふもとにかたひらの里
といふところに女をあひしりてかよ
ひけるかかの女のもとよりあさかへり
しける所をはんくわいまちうけて

五百人の中にとりこめて矢さきを
そろへてさんくにいるされともちやう
りやうかもとへは七寸五寸のやはつかす
してかへつてはなつぬしにそむかひ
けるそのゝちちやうりやうとうくわく
と三度となへてたちふりたれば五百
人のくひ一にはらりとおちたり
けり (第21紙)

(絵七) (第22紙) (第23紙)

はんくわい一人をたすけてそもく
いかなるいしゆありてかやうにしたかふ
そととひければされはこそわかくらゐ
をこさるゝそのいこんにうちたてまつら
んとするところにかゝるほうをたもち給ふ
ともしらすしてうちたてまつらんとせ
しものなりさてはんくわい一人をは
たすけけりこれひとへに君の御ため
なりとてたすけぬるこそやさしけれ
むさんやはんくわい出けるときは五百人
をめしつれいさきをなしてこそいつらる

10

15

5

10

たゝ一人かへるとていかに心ほそく
おもふらんいくちうとうをもたすけん
とてとうくわをとりなをしてしやう
ちくゝとなへてくひとこしとをな
てまはし給へは五百人のものともも
とのことくによみかへりけるこそふしき
なればんくわいちやうりやうとよはれ
けれどもそれよりちやうりやうはんくわい
と二人ともによはれける六百六十二て
うのひやうほうを二百てうをはりう
くうへわたされけり又二百てうをは
三百六十国へひろうせられけるとかや
ためしすくなき次第なり (第25紙)

(第24紙)

15

筆者市承朝倉氏重賢(朱印「松田」)

二 梗概

張⁽²⁾は、天下を治めようと鷲峰山^(うしゆふ)の十一面観音に参詣した。一七日籠り満願の夜半の示現に従い、前を流れる御手洗川添いに百日下り、淨妙国^(ちやうみ)に着く。示現通り、雲に

聖徳大学所蔵 ちやうりやう

縦32.2糎 横24.0糎

紙数	横(糎)		詞(行)
第1紙	47.0		15
第2紙	50.0		17
第3紙	51.7	絵一	
第4紙	50.0		19
第5紙	51.5	絵二	
第6紙	50.7		19
第7紙	51.7		20
第8紙	50.4		20
第9紙	51.5	絵三	
第10紙	50.9		19
第11紙	51.9		20
第12紙	24.0糎		6
第13紙	52.5	絵四	
第14紙	51.0		19
第15紙	52.0		20
第16紙	49.0		20
第17紙	51.3	絵五	
第18紙	50.9		19
第19紙	51.7		20
第20紙	51.1	絵六	
第21紙	50.7		18
第22紙	50.4	絵七①	
第23紙	50.0	②	
第24紙	50.6		19
第25紙	29.8		5
本紙計	1198.3		295

見返し 23.3 署名軸付紙 1 11.2

聳える橋を渡る途中、八十歳ばかりの翁が馬に乗ってなんとも狭い橋を轟駆けするのとすれ違ふ。翁は右手の沓を張良の袖に引っ掛けて落とした。張良は拾って沓を差し出すと、翁はまた落とした。なおも取り上げて差し出すとまた落とした。重ねて拾おうとしたときに、勇んだ馬に蹴られ沓は橋下に落ちていく。張良はこの沓を取ろうとして、三十丈下の水面を流れる沓を泳ぎ追うと、五頭十六角の五六丈ばかり、目は夕陽のごとき大蛇が現れ襲い掛かった。ついに張良は帰服させた大蛇から沓を取り上げ、翁に捧げた。翁は危難を克服した張良の剛気を称え、南方観音浄土に伴い、観音菩薩の相を顕して『陰陽巻』（兵法書）を与えた。さらに翁から南陽県の「あかたせん」という不老不死の菊酒を賜り、引出物に扇と鞭を与えられる。張

良は、引き出物の功德で瞬時に故郷に帰り栄花を極めた。

張良は大王（漢の高祖劉邦）のもとへ参り、この次第を奏上すると、七十余にして惣領となった、身内の樊噲³は、張良に位を越された遺恨から張良を三年余にわたり殺そうと窺い五百人の兵をもて急襲したが、兵法を得た張良に征伐され、樊噲のみが存えた。張良の法術により、五百の者も蘇生した。本来は樊噲張良と呼ばれていたが、このことあつてのちは張良樊噲と並び称されるようになった。六百六十二条の兵法は、竜宮と三百六十国に広告された。

三 『ちやうりやう』絵巻の書誌

絵巻一軸。寛文（二六六一―一六七三）頃。請求番号（880063）。表紙（縦三二・二糎×横二四・〇糎）は縹地に黄金色で竜蛇文・唐草文様を織る。題簽・内題はない。見返し（三二・二糎×横二三・三糎）は金紙。字高二・六糎。象牙軸、セピア色の平打ち紐が着いている。本文料紙は斐紙（雁皮紙・鳥の子）、金泥の下絵に草花、霞が施される。本紙計一一九八・三糎。挿絵七図。木箱入り。奥書の「筆者市丞朝倉氏重賢（朱印）」の署名は真筆である。

本書は、石川透氏によって紹介された「古典籍下見展観大入札会目録 昭和六十二年「張良」一軸・朝倉重賢」に相当すると推定される。

四 幸若舞曲の正本と舞の本

松本隆信氏は次のように述べている。

舞の本とは、戦国・織豊時代に栄えた幸若舞曲の詞章集のことである。慶長年中に刊行された古活字版をはじめとする多種の版本や、絵巻・奈良絵本を含む写本と版本がある。これらは幸若舞の直接の関係者の間で書写された正本（台本）と異なり、御伽草子と同じく読み物として刊行されたもので墨譜はついていない。安土桃山時代から江戸初期に多く刊行された。

「平家物語」「義経記」など軍記物に取材したものが多く、いわゆる正本については、戦前に、笹野堅氏が精密な調査をされ、その成果に基づいて、「幸若舞曲集」本文篇・序説篇の二冊を編纂されたが、その序説の中で、笹野氏は幸若舞曲の正本として、左の十四本を紹介されている。

- (1) 大頭左兵衛本〔室町後期〕写 (2) 大頭別本〔江戸初期〕写 (3) 平瀬氏本〔文禄二年写〕 (4) 大江本〔近写一部江戸写〕 (5) 毛利家本〔幸若小八郎安信他写〕 (6) 内閣文庫本〔江戸初期〕写 (7) 桃井氏本〔江戸初期〕写 (8) 越前本〔江戸中期〕写 (9) 大道寺氏本〔江戸初期〕写 (10) 東大国文学研究室本〔江戸初期〕写 (11) 藤井氏本〔東大国文学研究室本の傍本〕 (12) 藤井氏別本〔江戸中期〕写 (13) 京大文学部研究室本〔江戸初期〕写 (14) 京大文学部研究室別本〔江戸中期〕写
- 右の内、(10)と(11)は、同一正本の分かれてであるので、実際には十三種ということになる。

笹野堅氏は舞の本について次のように述べている。

この謂はゆる『舞の本』は徳川時代初期に於ける印刷術の発展と文学の要請とが、室町時代の絵巻や奈良絵本や単な

る写本、或は幸若舞の詞章をよみものとして出版したものである。これは当時舞曲を読むといふやうな意識のもとに流布したとしても、その制作された目的から観て、それは決して幸若舞の台本、舞曲の正本として出版されたものではなく、読み物乃至小説としての意識のもとに印行されたもので、幸若の正本とは相違したものである。

さらに同氏は日記類を博搜し、宮中の御前（正親町天皇）で舞の本を読んだ記録を明示している。中でも『言継卿記』の記録を引いて、「敦盛」を読んだり、高館、伏見常盤、常盤、張良、大織冠、烏帽子折、浜出、和田酒盛等の舞曲を舞った様子を克明に写している箇所は注目される。

麻原美子氏は、

舞の本は、室町後期から江戸初期まで流行した幸若舞（曲舞）という中世芸能の語り台本を、読み物用に転用したものの称である。（略）幸若舞も中世では曲舞と称されていた。その転用の証拠として、『私心記』永禄二年（一五五九）三月四日条（に「八島」を）、『言継卿記』永禄十年十一月二十五日条（に「敦盛」を）内裏での夜の宿直に参内して、お伽として曲舞の本を正親町天皇の御前で読んだ記録である。このように天皇は、曲舞本を読む一方で越前幸若大夫や大頭舞大夫に舞を上演させており、正月五日の恒例の慶祝に、北畠や桜町の声聞師が舞三番を上演している。従って芸能として舞大夫の舞姿や語り口を楽しむと同時に、その語りの物語性に興味を引かれ、読み物としても楽しむという享受がなされていた。（略）まず初めに幸若

舞を「舞の本」としてよもうとしたのは、貴族・僧侶・隠遁者達であつたとみてよいだろう⁽⁷⁾（稿者要約）。としている。

以上先学の研究に導かれて本絵巻は、幸若舞の正本（台本）を読み物用にした舞の本の絵巻形態のもの、すなわち「舞の本『ちやうりやう』絵巻」と称してよいだろう。室町末期から江戸中期にかけて制作された奈良絵を挿絵とした物語の絵本には、内容はお伽草子を主としたものと舞の本系のものがおおかつたと考えることができよう。正本には、曲節、庵点などが付いているが、本絵巻にはない。

五 幸若舞曲にみるへちやうりやう

笹野堅氏は、『幸若舞曲集 序説』の「第二章 幸若舞曲の正本」において十四本の正本を紹介している。そして諸正本の第一から第十四までは一から十四までの漢数字で示し、「諸本収むるところの曲名の同じきものは○を以て（略）版本は版の字で」一覧表を掲げている。それによると、曲目の「ちやうりやう」所収の状況は次のとおりである。第二大頭一本 第三平瀬氏本（文禄本） 第五毛利家本 第六内閣文庫本 第七桃井氏本 第八越前本 第十東大文学研究室本の七本で、すべて○印で表されていることから同曲名であること、版本には○印はないので、同曲目は含まないことが明示されている。

ところでこの七本のうち第三、第五、第六、第十本および慶應義塾大学本と聖徳大学本の内容・構成を確認するにあたり、以下の資料に依った。文禄本は『天理図書館善本叢書舞の本文禄

本⁽⁸⁾』に影印が、毛利家本は、横山重・村上学『毛利家本舞の本⁽⁹⁾』に影印がある。内閣文庫本は、笹野堅氏が「幸若舞曲集本文⁽¹⁰⁾」および古典文庫『舞の本 下へ内閣文庫本⁽¹¹⁾』に翻刻がある。慶應義塾大学本（古典研究会叢書『幸若小⁽¹²⁾ 幸若舞曲三十六種下巻』）に影印がある。慶應義塾図書館所蔵のこの写本は、笹野氏の紹介されていない本である。書誌については笹野堅『幸若舞曲集 序説』を参照されたい。東大文学研究室本は、『新日本古典籍総合データベース』（書誌ID:100000145）による。いまのところ第七・第八本の調査は及び得なかった。なお聖徳大学本は、河竹黙阿弥の「張良兵書賜謡曲」（明治十九年初演）【翻刻】日本名著全集『謡曲三百五十番集・佐成健太郎 謡曲大観第三⁽¹⁴⁾』とは直接関係はないと考えられる。

文禄本

今西實氏は先述した「天理図書館善本叢書『舞の本文禄本下』の「解題」において、

ここ二巻に収めた『舞の本』、もと大阪の富豪平瀬露香の蔵、笹野堅氏よつて世に紹介され、平瀬氏本と命名されたが、以後識語者名（文禄三年（一五九四）八月日〔上山与兵衛付宗久〕（印））によつて上山（宗久）本とも、書写年紀をとつて文禄本とも呼ばれてきた。いま本叢書では文禄本の称を用いる。（三頁）

と述べ、大頭流に属するものとされた。

内題は「長良」。冒頭は「去間長良天下をおさめん其ために」にはじまり「へたてゝとをき故郷に只一時に付て栄花にさかへ給ひけり」で閉じる。内容は聖徳大学本とほぼ同じで、「梗概」

に記した前半部に当たる翁（観音菩薩）より兵法を伝授され、無事故郷へ帰り栄花を尽くす段まで、「梗概」の後半部に当たる張良樊噲の部分はない。

毛利家本

『張良 蓬萊嶋 カイトリ 鞍馬出 馬揃 那須興一 四国落 / 木曾願書 未来記 元服曾我』の十番を一冊とし、表紙に外題を二段（線で示した）に書いたほぼ正方形の大きな題簽を貼ってある。表紙は、鳥の子紙を用い、天地に藍で雲形を描く。金紙の見返。本文は、漢字かな交じり、各丁九行、一行は二十四〜二十八字。

冒頭は、「去間張良ワ天下ヲ治メン其為ニ驚峯山エゾマイラレケル」にはじまり「隔テ遠キ古郷ニ唯一時ニ付テ栄花ニサカヘタマイケリ」で閉じる。内容は文禄本と同じで、張良樊噲の挿話はない。

内閣文庫本

内閣文庫本の本文は、「去間張良は天下を治めん其ためにじゆぶうぜんへぞまうられける」から「へたてゝ遠き故郷にたゝ一時に着て栄光に昌給ひけり」までで、「長良樊噲」の段はない。

東大国文学研究室本

冒頭「さるあひたちやうりやうは天下をおさめん其ためにじゆぶうせんへぞ参られける」から「へだてゝとをきこきやうにたゝいつときにつみてゑいぐはにほこり給ひけり」で閉じる、「張良樊噲」の段はない。

慶應義塾大学本

横山重氏の旧蔵本であるが、それ以前の伝承は明らかでない。この本は、すべて同一装幀の、鳥の子紙、両面書、綴葉装横形本（縦一七・五糎、横二四・五糎）で、一冊に一曲ずつ、全部で三十六曲三十六冊を存する。内題はすべてない。原装本の表紙は縹色地に金銀の切箔や砂子をまき、左肩に、金泥で草花模様の下絵を描いた紅色地の題簽を貼って、「長良」と墨書してある。

本書の写は一筆ではないが、同じ時期と思われる。書写奥書の通り慶長十四年（一六〇九）頃の書写であろう。「三木」には、幸若小八郎大夫の署名と、慶長七年の年紀があるが、これは元の本の奥書を写したものであろうか。

本文は「さるあひた長良は天下をおさめんそのために驚峯山へそまいるけり」から「隔て遠き古里にたゝ一時について栄花にさかへたまひけり」までである。漢字表記を多用する点でも文禄本に共通する。濁点表記を用いる。聖徳大学本の「長良樊噲」の段はない。

その他の曲目に現れる人名表記

笹野堅氏による『幸若舞曲集本文』翻刻の曲目に現れる三人物名の表記と内容を点検してみよう。人名表記は各作品により異なり、ゴチックで表した。カッコ内の算用数字は引用頁を表す。

満仲（毛利家本。〈書写奥書〉「于時元和四年（一六一八）五月

吉日 桃井／幸若小八郎大夫／安信（花押）

(満仲) 早態のしるしに。机の上なる。御経一卷をつとつていや張良か。一卷の書と名付。(一〇〇頁)

敦盛 (大頭左兵衛本)

(熊谷次郎直実) かれは多勢。これはふせいはむくわひかへつて。ちやうりやうがげいをつゝしむたまゝ。なをさねは生を弓馬の家に生まれたくみを。らくせきにめくらしいのちを。おなしうす。(二二五頁)

しつか (大頭左兵衛本)

いはむやよしつねけいかしむふやうはむゑき程はよもあらじ。ましてはむくわひちやうりやうがいきおひにもおとりたる。(三四六頁)

屋嶋軍 (毛利家本)

(次信) 其上軍陳にて仇一騎うたるれば味方千騎のつより味方一騎うたるれば仇千騎のつよりと承りて候ぞや其上此者共は異国のはんくはい長良をあざむく程の仁でござう軍神の御手向に只一矢ざうとさゝゑてあり(三九〇頁)

高たち (大頭左兵衛本)

わしの尾かたおかくまる太郎源八兵衛廣綱備前の平四郎けゝのよろいかふとのおゝしめ太刀はき矢おひて皆なからうとに腰をかけ目とくきつと見たる此人々のありさまははむくわいちやうりやうあむろく山も面をそむはつゝはちぬへし(四二六頁)

鈴木 of 三郎重家十三騎きつておとせはおとゝかめぬかてにかけて廿七騎なきふする(略) いこくのはむくわひちやうりやうもかくやとおもひしられてあり(四三〇頁)

和田宴 (毛利家本。《書写奥書》「元和二^丙曆(一六一六) 皐月

中旬 桃井／幸若小八郎大夫／安信(花押)」)

五郎時宗はふるひといつしところに。矢の根をみがひて居たりしが。あまりのねむさに基盤ひきよせ枕にしゆたかにこそ伏にけれ。舎兄祐成まぐらがみに立寄せ給ひ。いかに五郎それ長郎が四十二ヶ条の兵法の巻物を。がくしたりと云とも。酒をすごしぬればなにゝもとをとりぬ。千日したる用心も。目をつよくぬればゞ一夜にむに成ぞ。(四七三頁)

十番斬 (毛利家本。《書写奥書》「慶長十七年^{壬午}(一六一二) 大

族上吉日 桃井／幸若小八郎大夫／安信(花押)」)

樊噲にくらぶれば。時宗(祐成(助成)の弟)はまされり。張良に。あはすれば高祖のなせし。威勢たり一天四海が、其内にかくれぬ強の。者なれば先の。非をかへし今より後は。頼朝にちうしんたるべし本領なればうさみくずみ川津三ヶの庄。永代安堵の御状。かくのごとく源の。頼朝判とぞよみあけゝる。(五二九頁)

張良 (内閣文庫本) 五三一―三五頁(先述により略す)

張良の内(短中之文(張良))。「幸若正信本(張良)」。「彰考館幸若安信本(当該箇所には人名表記はない)」

点検の結果、本絵巻の仮名書の「ちやうりやう」と同様の表記は大頭左兵衛本にみられた。幸若舞曲の曲目にみられる人名「張良」(便宜上漢字表記にする。以下同じ)は単独表記の場合が大勢を占めるが、「樊噲・張良」と二名連記の場合、「樊噲・張良・安祿山」と三名を挙げる場合とがある。いずれにも

共通している点は、登場人物の剛者への讚美あるいは形容描写として中国の歴史上の人物名が援用されているのであって、聖徳大学本のように、張良樊噲自体の故事（依拠資料不明）を語っているわけではない。そのことは、「岩波新日本古典文学大系59」が底本としている寛永整版本（旧刻）、東京大学総合図書館蔵霞亭文庫本、国立国会図書館本についても機能としては同様とみられる。

漢字表記・仮名表記と成立の前後関係

これまで見てきた幸若舞曲集の台本は、聖徳大本に比べ漢字表記が多い。そのことは諸本成立の前後関係と関わりがあるのだろうか。台本のなかから任意に内閣文庫本と東大国文学研究室本をとりあげ、聖徳大本の本文と比較してみよう。聖徳大本を軸として下欄の（ ）内に内本、東本（両者が同表記の場合は無名称）と略称し、それぞれの異同を示す。その場合、漢字仮名表記の別は煩雑さを避けるため含まない。

あらたなる御こゑをいたさせ給ひわ／れは大し（ナシ）た
いひのちかひにてしゆ／しやうさいとのほうへんあらまほ
しき（第1紙）／によつてよるとなくひるとなくり／しや
うのはうへんをめぐらしける／ところまことに（ナシ）
なんちりしやうを／かうふらんとおもはくこのまへにな／
かるゝ川について百日しもにくた／るへしそれしん／くを
おこして百／日くたるものならはちやうみやうこ／くとい
ふくにゝつくへし（第2紙）

〔絵一〕（第3紙）

それみちすからのありさまはしか／のすみかとらふす野へ
かゝる大こく／のひろき野をゆきすきかうたく／のつゝみ
をつたひて（ナシ）百日と申には／ちやうみやうこくにそ
つきにける／さるほとにをしへのことく（ナシ）かのくに
／の中ほとにひとつのはしこそわた／されたれ（略）はし
たかくて雲／にそひえてたゝ（ナシ）にしを引よることく
／なりみるにきもきえ心をいたまし／めひきふるひあしす
きましく身／のけよちてわたるへきやうさらに／なし（ナ
シ）されともしけんなりければ（略）（第4紙）

〔絵二〕（第5紙）

されはあまりのいふせきにめをふさ／きやう／くはしをわ
たり給へはちう／てい（中程）のことなるにむかひをさつ
と（内本、張良急度。東本、ちやうりやうきつと）／見て
あれば（略）（第6紙）

ちやうりやうはもとより（ナシ）しん／きたゝしくおいた
るをもつて（人はかならず）ふも／のことくやまふに
はゝかりなしとて／いそぎ（うにおもふとてこの）くつを
とりあけておきな／にあたへしか（あたへたてまつるさ
し）かけてはかんとしてとり／はつしおとさるゝ（略）こ
のくつをとらんとてちやうりやうともに（東本、同じ。内
本、「張良友に」。当て字）おち／にけりそのはしのたかさ
三十よち／やうなりくつは水にうかひてなかれ／ゆく（内
本、「查は水にうかへは」。東本、ナシ）（略）（第7紙）
すてにちやうりやうをの／まんけしきそしたりけるちやう

りや／う（内本、「急度見て」。東本、「くきつと見て」すこしもさはかす（内本、「少しもひるます」。東本、「ちつともひるます」）およきよつて／そのくつをとり大しやのつのにのり（くこふしをにきりつのゝあひ七つ八つはり）これは大しやはなをもいかりを／なせしかいかゝは思ひけんかしらに／いたきあけてちやうりやうをはし／のつめにおろしければ（略）（第8紙）

（絵三）（第9紙）

おきな御らんしてあつかうなりやちや／うりやうさやうの心にてこそひやう／ほうのかなふけれなんちかかうおくをたゝさんそのために（東本、「ちやうりやうよおくひやうにてひやうほうのかのふへしともおほえねはんちがかうおくを見ひやうほうをつたへんため」。内本、「張良。臆病にて兵法の叶ふへしとも覚えねば。汝は剛臆を見て。兵法を伝ふため」）しゆくの／さうをけんしたりいささはこのつ／ゐてに（東本、「いさゝらば此ついでに」。

内、「いさ更是此次而」。表記の違ひ参考）おきなかしやうとおかま／せん（略）せつなか／あひたになんはうのくはんおんのし／やうとにつき給へは（内本、「着給ふ。翁御覽して。爰こそ我常に住。都なれと仰ければ」。東本、「つき給ふおきな御らんし」□てこゝこそ我かつねにすみみやこなれとおほせければ）馬はへいちにとひつきぬ／

（略）（第10紙）

廿五のほさつたち三十二（三十三）さうに／わけてようかうたり（ナシ）かふのほさつは／こゑく／にきよくをな

したまひあそふ／ち（せ）うし（ち）やくきん（東、同じ。「む」くこう（東、同じ。内、「う」ナシ。箆篋）ひわによう（「ねう」。鏡）／とうはつまでもたつとからすといふ／事なししちくのしらへこまやかに／かんたんきもにめいしたりさてちや／うりやうを引くして（くうてなに）いらせ給ひけり／あら有かたの御ことやしやうとお／かむてたさよかて（くおきなは）略）めんやうくはん／といふものをとりいたさせ給ひ／このまきものゝとくゆうは大（東、「た」。内、「他」。しんつう／をあきらめよ世のきつけうをあらはし（第11紙）／（略）このまきものゝ／うちにあるへし①このまきものゝ／うちにあるへし（候そ）それ給はりたへちやうり／やう（くちやうりやう）あまりのかたしけなさに三といった／たきくわいちうす一／はんの書／これなり（第12紙）

（絵四）（第13紙）

そのゝちさうのとうしをいたしやう／との（くあかた）せんと申てことはにもをよひ／かたき（東、「ことはもなき」。内、「さら／く詞もなき」）さけをへいるりのつほにいれ／（略）②さかつきちんみのくわしをさかなに／てそれ（内、ナシ）たまはれ（内、同じ。東、く／とおほせける）ちやうりやう（内、「くちやうりやう」。東、く／うけたまはり）あまり／のかたしけなさに三といったゝき（ナシ）たふ／とひとつ（ナシ）うけほさんとせしときお／きな御らんしていかにや（東、「しはし」。内、「暫」）ちやうりやう／さかつきをひかへよなんちかしやうみや／うこ

くにてくつのわつらひにさけの／ゐとくをかたつてきかせ
んむかしなから（くく）／の大わうしゆみのはんふくに
あかり／ふものおんをほうせんために（ふものをんをほ
うせんためしゆみのはんふくにあかり）はくせき／のた
うを三十六ちう（東、同じ。内、「堂」）にくむ（略）（第
14紙）

（く）なむにやうけんといふ山にすつる彼」なんりや
（内、「にや」。東、「や」）う／けんといふやまたはたかさも
四まんゆ／しゆんひろさも四まんゆしゆんにてき／くより
ほかのくさおひす（く）彼きくのはのひろき事まはり八十
ひろにひろごれり」（略）そのきくの葉にをくつゆかした
のきのみに／おちあひてふらうふしのくすりと／なる
（略）③このあかた／せんはいちとのめは一千人二とのめ
／は二千人かちからつきつゝしゆみやうち／やうおんなる
さけなり給はり給へちやう／（第15紙）

りやう（くちやうりやう）あまりのかたしけなさに三と／
つゝけて（つゝけて三と）くみにけり二こんになれば／
さかなとてあふき一ほんいたさるゝ／このあふきと申は
たゝめは八つの／ほねひらは二十五のほねは（あり二
十五のほねは）二十五の／ほさつ八つのほねはやくわう
ほさつ／このあふきをもちぬればたとひね／かはすとすく
にしやうとへまいるへし／ゑんめいさうとかひ（東、
「い」。内、「き」）てはいのちをのふるとよまれたり④こ
れをさかなに／いまひとつたまはり給へちやうり／やう
（くちやうりやう）うけたまはつて／又三とこそ／くみに

／けれ／（第16紙）

（絵五）（第17紙）

三こんにさかなとてむちをひとつ／いたさるゝさうかいふ
と申てこのむち／をこしにさしうみ川をわたるに／
（く）舟にのらねとすいしやう）へいちをありくことくに
て（のことくはしれとも）みつの／そこにもしつまつかい
（すひ）ちうにいる（れ）／ともそのみつ身にします（ぬ
なり）⑤身をかく／さんとおもふときわう（おん）きやう
のほう／ををこなはゝ（しゆし）木のはのしたにかく／る
とも（れと）人けん（ナシ）のまなこに（く）みゆる／
事なし（見えぬなり）かゝるめてたきてうほう／そかし
（ナシ）こ（そ）れをさかなにいまひとつ／たまはり給へ
ちやうりやう（くちやうりやう）うけ給は／つてよき御
（ナシ）さかなかなおほせはお／もしもとよりもちやうり
やうは大しゆ／にてまします（ナシ）さしうけ／のむ
／ほとに八十一度そ給ふたりける（給りぬ）／をよそちか
らは八百（八万一千）人かちからなり／ありかたしとも中
く／申にをよは／さりけりてうほうのゆを給はれば／（第
18紙）はやかへらん（酒はよく給りぬけかふせん）とおも
へともみちをたしかに／しらされはあんしわつらふてそ／
みたりけりされは（わすれてしらはこそ）そのよ（れ）う
にこそゑん／めいさうとさうかいふとを（く）給はれま
ね／かはやとおもひてわかふるさとのかた（ナシ）／をま
ねきけりされとも（へたてゝ）とをきこき／やうにたゝ一
時についてゑいくわに／さかへ給ひけり（第19紙）

聖徳大学本詞書の書写姿勢

右は、およその異同を抽出したものである。聖徳大本になく、内本・東本にある文に傍線——を付してみた。便宜上これを書写者の省略した可能性を含む部分と仮定すると、「内本、東本、ナシ」と記した箇所は聖徳大本の加筆箇所と想定される。そこで気づいたことを挙げると次のようになる。

一 本絵巻の書写者朝倉重賢は、文意を明瞭にするために加筆をし、なくとも意はとおると考えられた箇所は省略したのであろう。

二 東大国文学研究室本と内閣文庫本の本文は近似する。そして東大本のほうが聖徳大本にやや近い箇所もある。

三 ①②③④⑤の内容は、翁即ち観音が張良に兵法書『陰陽巻』と南陽県の不老不死の菊酒を給わる場面である。各条とも「(翁) たまはり給へちやうりやう。ちやうりやうあまりのかたじけなさに」の文型即ち会話文と地の文が繰り返される。前者の翁は「ちやうりやう」と呼びかけ、冒頭・地の文は「ちやうりやう」(②を除く)で起筆する。

しかし、聖徳大本には、呼びかけに呼応する地の文冒頭の「ちやうりやう」はない(②の東本も)。このように見ると、会話の末尾及び地の文の起筆を「ちやうりやう(張良)」とする幸若舞の台本・舞曲の正本のほうにより「語り」の効果が込められているように思われるがいかかであろうか。語り台本を読み物用に書き下ろしたのが聖徳大本であり、意が通れば略述しても差し支えなかったからであろうか。

四 漢字と仮名表記の異同については省いたが、東大国文学研究室本および内閣文庫本のほうが漢字表記は圧倒的に多い。

六 その他の『ちやうりやう』絵巻について

従来の『ちやうりやう』関係の絵巻および冊子形態の先行研究については、針本正幸氏による「國學院大學図書館所蔵『張良物語』の解説と翻刻」の「註」に尽くされている。概要を記すと次のようになる。(内は注番号を示す(前掲論文一一〜一二頁))。

(1) スペンサー本の翻刻については、松田存氏「スペンサー・コレクション巻子絵巻「ちやうりやう」」(『二松学舎大學東洋學研究所集刊 第二三集』平成四年(一九九二)度)がある。

(4) 柳沢昌紀氏は、中京大本の特徴について、「本学図書館の絵本の内容は、謡曲でも幸若舞曲でもない。上巻に子房取履譚は出てくるが、その後に『史記』項羽本紀に記される内容が書かれている。つまり中京大本の内容は、張良の一代記とも言うべき物語となっており、御伽草子と位置づけられるものである」(『奈良絵本「張良」解題・翻刻』『文学部紀要 第四十二巻 第二号』中京大学文学部 二〇〇八)

(5) 大阪大谷大学本の翻刻については、高山尚子氏「大阪大谷大学蔵奈良絵本『張良』翻刻ならびに国学院大學蔵絵巻『張良』一部校異」(『立正大学 國語國文 第四八

号』立正大学國語國文学会 平成二二年三月)がある。

(6) 黒田彰氏はスペンサー本と大谷大学本は別系統と指摘された。

(7) 柳沢昌紀氏は、黒田彰氏のご論をもとに、スペンサー本を甲本とし、その他の諸本を乙本とし、「中京大本は、大阪大谷大本とはほぼ同じ本文を有する。漢字や仮名の違いや読み仮名が付される箇所の違いはあるが、同一の本文を底本として書写されたものではないかと思われる。さらに言えば、学習院大学日本語日本文学科研究室蔵絵巻、國學院大學図書館蔵絵巻、京都大学附属図書館蔵絵巻も殆ど同一の本文を持つことが判明した。」と指摘されている(前掲注(4) 柳沢氏論)。

以上のことから柳沢昌紀氏は、中京大本の内容は、御伽草子と位置づけられるもの(「注4」)で、中京大学の本文は、大阪大谷大学本、学習院大学本、國學院大學本、京都大学本とはほぼ同じ本文を有し(「注7」)、黒田彰氏の論(「注6」)をもとに、スペンサー本を甲本とし、その他の諸本を乙本とした、ということである。

それでは甲、乙本の決定的な違いはといえば、針本正行氏の指摘されているように、スペンサー本「ちやうりやう」の巻末は、「抑黄石公と申は、まりし天のすいしやく也、ちやうりやうと申は妙音ほさつのけしん也」と黄石公と張良の本地が語られ、乙本は、子房取履譚をもって終わることである。柳沢昌紀の論を勘案すると、甲・乙本ともに内容は御伽草子系と呼ん

でよいと考えられる。

まとめ

聖徳大学本は、幸若舞の台本、舞曲の正本を読み物用にした舞の本「ちやうりやう」絵巻として製作されたものである。つまり幸若舞曲正本を承け、御伽草子(甲・乙本)系に先立つ作品と考えられる。内容は二段からなる。第一段は、冒頭から「されともときこき／やうにたゝ一時についてゑいくわに／さかへ給ひけり」(第19紙6～8行)まで、第二段は、「さるほどに」(第19紙8)から「ためしなき次第なり」(第25紙5行)までである。

これまで見てきたように、第一段・前半部の「ちやうりやう」の内容は、文禄本、毛利家本、内閣文庫本、東大国文学研究室本、慶應義塾大学本にはほぼ一致する。いまのところ聖徳大学本だけに見られる「さるほどに」に起筆する「張良樊噲」の故事は、典拠未詳である。「その他の諸本」の後半にも張良と樊噲は登場するが、内容は異なる。第二段は一軸内に改行なしに書かれている話であるが、二段の冒頭は、「さるほどに」という接続詞ではじまり、書写に当たり別段の意識はあったように考えられる。この接続詞は、一般に場面転換を先行の事柄と関係して、後続の事柄をさらに改めて説きおこす際に用いる語である。これについてはかつて述べたことがあるので、拙論²⁾をご参照いただければ幸いである。例えば、群馬県立歴史博物館所蔵本『俵藤太物語』絵巻五巻の冒頭は巻一「朱雀院の御時」、巻二～五は「さるほどに」ではじまる。

聖徳大学本の依拠資料は明らかではないが、詞書の近似する内閣文庫本や東大国文学研究室本などに拠りつつ、加筆あるいは略述しながらあらたに挿絵を施し、読み物用に仕立てた「舞の本絵巻」である。正本の漢字書き部分が仮名表記になっている場合がおおいのも、読者によりわかりやすいようにという配慮からであろうか。さらに幸若舞の語り台本（正本）と、それを読み物用に転用した舞の本の文体とを比較し、その効用について一考する必要があるだろう。

その他、翻字の「なんり（里）やうけんといふやま」（第15紙）に当たる箇所は、イ「ナニヤウケント云山」毛利家本三五九頁、ロ「なんにやうけんといふ山」内閣文庫本五三四頁、ハ「なんやうけんといふ山」東大本、ニ「南陽縣という山」八一九頁（ロは翻刻、他は影印による）とある。「南陽」は地・河・磯・郡・縣名は知られるが「南陽縣という山」の意ははっきりしない。「南陽縣（にある）という山」の意か。諸橋大漢和辞典「南陽縣菊水」項に、河南省南陽縣に出る水の名。此の水を飲めば長寿を得るといふ、として『太平御覧、百卉、菊』所収「風俗通」の「南陽縣の山上にある菊と菊水の話」を載せる。「イ・ロ・ハ」はニ「南陽縣」の訛りとして、「なんりやうけん」については不明。

作品研究としての典拠、成立過程および伝承過程等についての究明は今後の研究課題であらう。

注

(1) 石川透著『奈良絵本・絵巻の生成』三弥井書店 二〇〇三年

五一頁。なお、朝倉重賢については未詳。同名号の人に、朝倉景実（寛永二年へ一六二五）天和三年（一六八三）軍法家。初め沢崎氏。名・重実・景実・景尚（重賢とも）。内匠・主水・門人。江戸本郷に開塾し、門人に教授した（『国書人名辞典』）というが別人であろう。この件については、すでに石川氏の前掲著二三九頁に指摘されている。

(2) 張良 中国、漢初の功臣。字は子房。高祖の作戦の中樞となり、蕭何（しょうか）、韓信とともに漢創業の三傑といわれた。『史記』『前漢書』『高士伝』に見える黄石公兵法伝授説を素材とする。』（村上 学『日本古典文学大辞典』）

(3) 樊噲 中国、漢の高祖劉邦の功臣。沛（はい）の人。紀元前二〇六年、楚王項羽と劉邦とが鴻門に会した際、謀殺されそうになった劉邦を機転をもって脱失させた。のち、劉邦が漢王になると將軍になり功をなした。前一八九年没。

(4) 松本隆信（幸若小八郎正本）幸若舞曲三十六種 解題『古典研究会叢書「幸若小八郎正本幸若舞曲・下」ハ影印』（いわゆる「慶應義塾本」のこと。九一五・九一六頁）

(5) 「幸若舞曲集 序説」臨川書店 一九七四年 三〇三頁（第一書房 一九四三年）

(6) 「注（五）」に同じ。七二頁

(7) 麻原美子校注「舞の本」新日本古典文学大系（麻原美子「解説」岩波書店 一九九四年 五八九・五九八頁）

(8) 「天理」國書館 善本叢書舞の本文禄本下 八木書店 一九七九年 四二五―四六六頁

(9) 角川書店 一九八〇

(10) 「幸若舞曲集 本文」臨川書店 一九七四（第一書房 一九四三年）五三一―三五頁

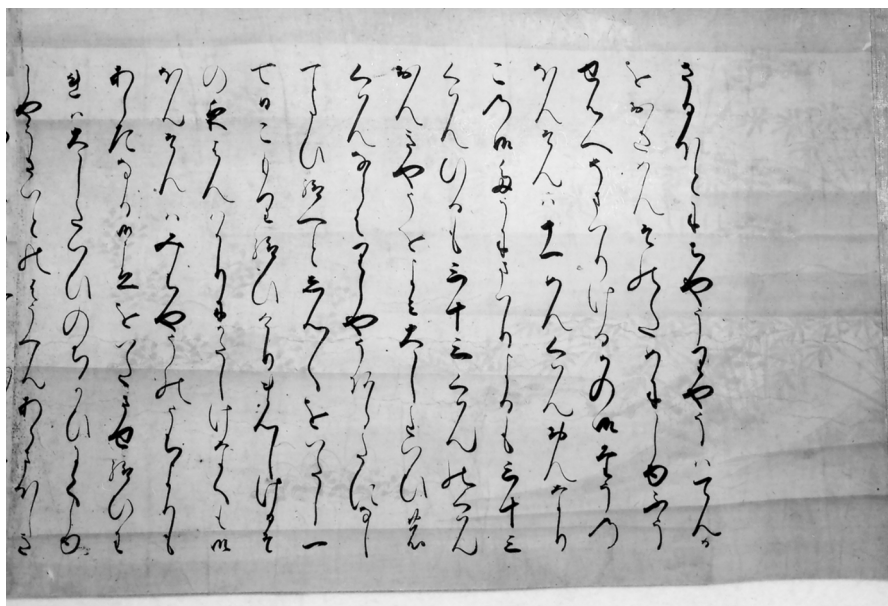
(11) 古典文庫第三八九冊「張良軍術記」一九七九年 二六三―二六八頁

(12) 古典研究会叢書（幸若小八郎正本）幸若舞曲三十六種下巻』汲古書院 一九七三年 慶長頃写。

- (13) 日本名著全集刊行会『謡曲三百五十番集』一九二八年。
- (14) 佐成謙太郎『謡曲大観 第三』明治書院 一九三一年。
- (15) 「注(4)」に同じ。松本隆信解題・九一六・七頁
- (16) 「注(4)」に同じ。松本隆信解題・九二〇頁
- (17) 安祿山 中国の唐代、安史の乱を起こした武將。ソグド人と突厥人との混血といわれる。玄宗皇帝の信任をえて、三節度使を兼任。七五五年(天寶一四) 乱を起こし、洛陽で大燕皇帝を自称、龍姫の子をたてようとして、子の慶緒(けいしよ)と側近に殺された。七〇五―七七七『日本国語大辞典』
- (18) 「注(7)」に同じ。
- (19) 『國學院大學 校史・学術資産研究 第八号』二〇一六年三月 國學院大學研究開発推進機構 校史・学術資産研究センター。なお、國學院大學図書館所蔵『張良物語』関係の調査資料・図書館デジタルライブラリー等について同大学兼任講師・林利久氏にご高配をいただいた。深謝申しあげる。
- (20) 摩利支天は、陽炎の神格化で、身を隠して障礙を除き、つねに日に仕えたとされたインドの民間信仰の神、中世に武士の守護神として信仰された。妙音菩薩は、法華経妙音品に出る「菩薩」。東方の浄華宿王智如来の浄光莊嚴国を住居とし、甚深の智慧を成就し(略)、八万四千の菩薩とともに娑婆世界の靈鷲山に來至して、衆生に法華経を解き救護するとされる(『岩波仏教辞典』)。
- (21) 神奈川県立歴史博物館(個人蔵)『俵藤太物語』五軸本について(『在外日本重要絵巻集成【研究編】』笠間書院 二〇一一年 四五―五七頁)

付記

聖徳大学図書館所蔵『ちやうりやう』絵巻の調査・閲覧にあたり、同大学学長川並弘純氏および同大学図書館青柳邦忠氏・戸枝敏郎氏に大変お世話になった。ここに記してふかく感謝申しあげる。



第一紙



絵一



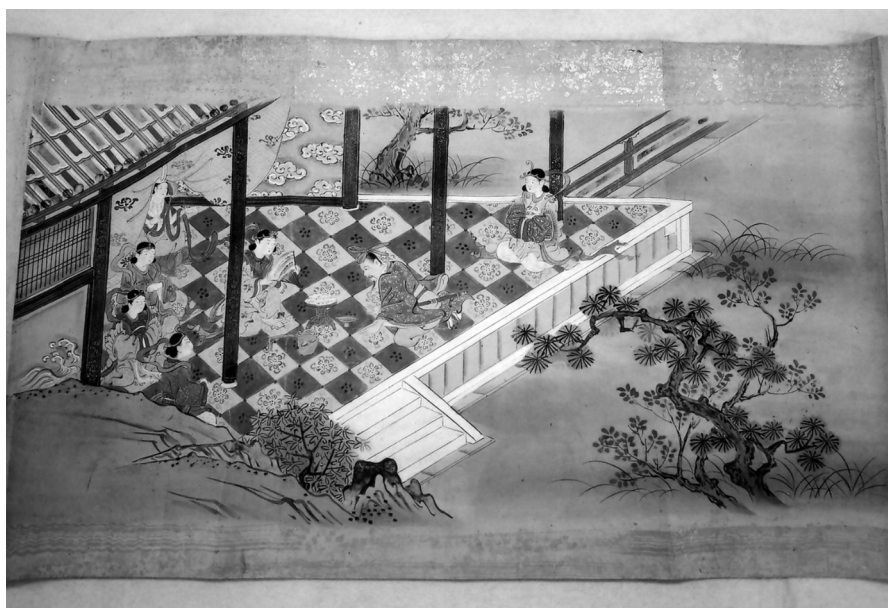
絵二



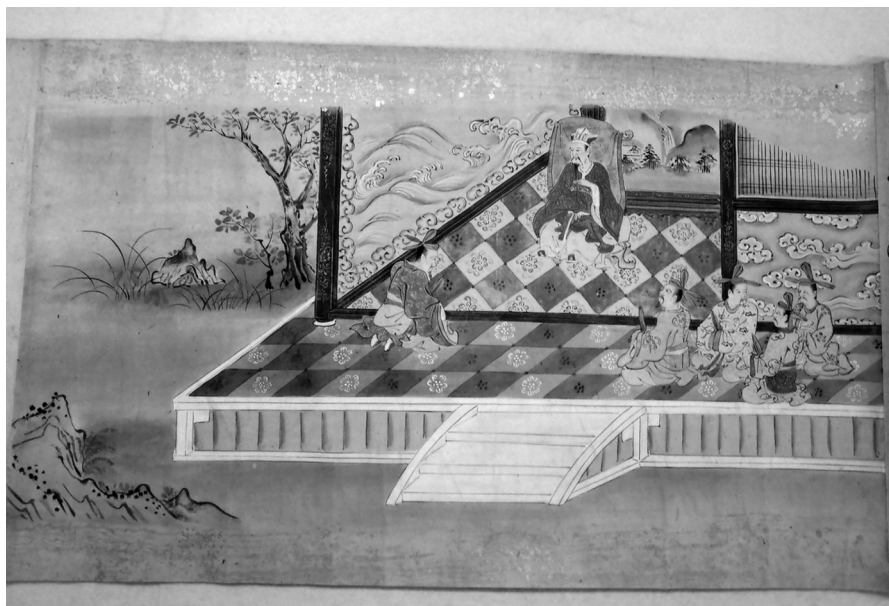
絵三



絵四



絵五



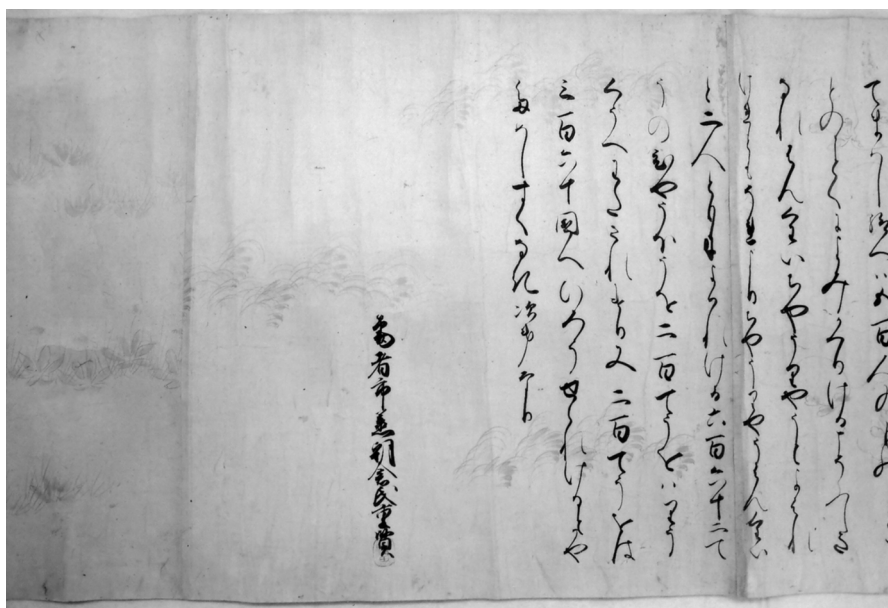
絵六



絵七



絵八



第25紙



落款（署名·印章）